

祖先崇拜の社会的基礎

石 瀬 秀 治

はじめに

わが国は、明治維新後やまた特に太平洋戦争後、徐々に近代的民主化の過程を推進してきた。そして、そうした近代的民主化の過程は、生活の多くの領域において、その程度にはいろいろと相異がみられるにはしても、さまざまな成果を収めるに至っている。しかし、それにしても、それはまだ矢張り多くの生活領域において不十分、あるいは未完成であり、封建的な残滓や遺制を残していると云わねばならないのである。そして、この事は、特に、人間生活にとって極めて重要な意義と役割りをもっている、家族の制度についても云い得ることなのである。

言う迄もなく、太平洋戦争後におけるわが国の大きな社会的変革として民法改正と農地改革を挙げることができよう。それらのうち、民法の改正は、男女同権と諸子平等の原則を打立てることによって、近代的家族が成立する法的基礎を確立したのである。その結果、日本の家族は、特に都市社会においては、實際次第に近代的家族への変動や発展をしめすに至っていると云ってよい。しかし、わが国の全人口のなお四〇%にも達する農村社会においては勿論、さらにわが国を全体的に展望してみても、依然として従前からの家父長制家族が根強く存続しているのである。

そして、そうした家父長制家族のうちには一般に祖先崇拜という信仰形態が生み出されているのであり、またそう

した祖先崇拜が家父長制家族を支持しているといった関係が見出されるのである。元來、わが国においては外形的外觀的には宗教的信仰が可成り活潑であるようにみえるのではあるが、しかしその信仰形態や信仰内容は、大まかに云って、特に農村社会においては、そうした祖先崇拜を中心とするものであると云ってよいと思う。それでは、わが国における家父長制家族と祖先崇拜とはどのような因果的適合関係をもっているのであろうか。一般にいかなる社会的存在が家父長制家族を生み出し、また引いては祖先崇拜という宗教意識を作り出しているのであろうか。私はこの小論でそうした視角から祖先崇拜の社会的基礎とみられるものを簡単に分析してみようと思うのである。

—

祖先崇拜は、云うまでもなく、祖先を敬愛畏敬し、祖靈を崇拜祭祀するという信仰形態なのであるが、そうした信仰形態が成立するためには、先ず次のような一連の宗教的觀念が必要なのである。つまり、人間がこの世を去った後といえども、なおその靈魂は不滅であり、その靈魂はこの世におけると同様の生活を彼の世においても続けるものであると信ずる靈魂不滅の觀念、従ってそうした靈魂はこの世の生活において使用したものを同様に彼の世の生活においても必要とし、こうした必要品の充足をこの世に生存する子孫の奉仕に頼ること、またそうした靈魂はこの世における自然現象や社会現象を思ひのままに支配し、子孫が靈魂にたいする報恩の供養を怠り、靈魂の必要品を充分に供えない場合には、靈魂は怒ってこの世の子孫に不幸や危害を齎して復讐し（この場合の靈魂は荒魂Ⅱあらたまと呼ばれる）、反対に子孫がそうした供養を怠らない場合には、恵福や守護を与えるものであること（この場合の靈魂は和魂Ⅱにぎたまと呼ばれる）などを信ずる宗教的觀念、こうした靈魂觀念や宗教的觀念が祖先崇拜の觀念的前提となっているのである。そして、こうした靈魂觀念や宗教的觀念は人間社会の古い時代には広く一般に認められるところの

ものなのである。それでは、そうした靈魂觀念や宗教的觀念は人間社会の古い時代において一体いかなる社会的条件のもとに生み出されたのであろうか。

元来、宗教は人間存在にまつわる永遠なる限界状況としての死や罪という根源的有限性から生ずるものであり、そうした根源的有限性にかかわる魂の内奥における主体的実存の問題であると云ってよいであらう。とすれば、いま罪の問題は別としても、とりわけ死という事実は、知識に乏しくて科学の未発達な古い時代や社会の人間にとって一体何を意味したであらうか。云うまでもなく、そうした人間歴史の古い時代においては、とりわけ、長老者は、長年にわたる社会的共同生活の結果、その社会の行為様式や生活様式に熟達し、強い敬愛や高い權威をうけてその生活共同体を指導していたであらうから、そうした長老者の死は後に残された子孫や親近者のうちに限りない寂寞感や孤独感や無力感を生み出し、彼らやその生活共同体にとっては重大な危機や脅威であつたに違いないであらう。そして、それがやがてそうした祖靈のこの世への復帰やこの世にたいする守護を激しく希求せしめたであらうと考えられるのである。これがそうした時代に靈魂不滅觀や祖先崇拜を生ぜしめるにいたつた心理的条件であると云ってよいであらう。

しかし靈魂不滅觀や祖先崇拜は決して単にそうした心理的条件のみによって生ずるものではない。それは一層根本的には次のような経済的条件に規定されているのである。つまり、人間歴史の古い時代における、自然的条件に支配されることの多い、生産技術の未発達な、従つて生産力の低い、採集狩猟農耕の氏族共同体においては、そうした氏族共同体における共同的生産活動に習熟し、その共同的生産関係を指導する地位にある長老者の死はまさしくそうした生活共同体における生産的労働力の重大な喪失なのであり、従つてそうした生活共同体における社会的生産活動や社会的生産關係にたいする、従つてまたそうした生活共同体の存続にたいする重大な損失や危機を意味したのであ

る。だから、この場合には一層強くそうした祖霊のこの世の生活共同体への復活やそれになりたいとする守護が熱烈に希望されたと考えられるのである。そして、そのようにしてこの世の生活共同体に復活更新せしめられた祖霊はそのことによってその生活共同体の結合団結を強化し、その社会的生産活動における協働関係を保護するという役割りを果たしたのである。靈魂不滅觀や祖先崇拜はこのように根本的にはもともとこうした氏族共同体における社会的生産活動の維持保護を条件とし、そうした事実を媒介として成立したものと云わねばならないのである。

しかし、それにしても、人間が、とくに長老が、その死後、靈魂のかたちにおいて、敬愛畏敬されるといふのはいかなる社会的条件に基づくことなのであるか。端的に云えば、それは、未開の生産力の低い、交換過程が未発達にして自給自足的な、狭小にして閉じられた封鎖的社会、つまり社会の狭小な封鎖性ということを基礎にしているのである。一般に祖先崇拜は農耕民族や農民に比較的多く認められるのであるが、農業社会においては、その主要生産労働の場である耕地や山林などから自由に移動することが困難不可能なことや交通通信運輸の手段や機関の未発達なためにその生活は必然に狭小な生活空間に閉ざされた定住的にして自給自足的な封鎖的生活とならざるを得ないのである。ところで、そうした狭小な封鎖的社会においては、外部の社会から新しい別異な行為の様式や対象が移入されることがなく、またその内部においても高い社会的等質性が支配しているために、同様に新しい行為の様式や対象が作り出される可能性も少く、その生活はおのずから伝承的慣習を即自的に遵守する伝統的な生活となる。そして、そうした封鎖的社会に定住する場合には、個々人は早くからその社会の伝承的慣習や伝統的生活様式に習熟し、やがてそれに通暁するようになり、そこにそうした伝承的慣習や伝統的生活様式に熟達通暁した長老の權威を生み出すようになる。

しかも、例えば、日本の農業社会においては、従来手労働的集約的な家族的小経営の農耕が行われ、合理的科学的

な技術よりも非合理的篤農的な技能が重んぜられたため、そうした技能や経験に熟達通曉している長老者に權威が与えられ易かったのである。また、狩猟牧畜民族においては、狩猟や戦争という生活の必要のために、若年者の体力武力や氣力勇氣などが高い社会的価値をもつのであるが、農耕民族は一般に闘争や戦争の機会などの少い平穩な農耕生活を送るところから、そうした若年者の体力や氣力がそれほど尊重される社会的基礎を欠くのであるが、こうした事實が農耕民族において一層長老者の權威を支持することになっているのである。

更にまた、伝承的慣習や伝統的生活様式に熟達通曉せる長老者は、長い年月にわたって幾多の困難や災難に耐えながら、率先してその家族員や社会成員を扶助し指導してきたものであるために、彼らから高い感謝と尊敬の念をもつて迎えられるようになるのは当然であろう。そのみならず、狭小な封鎖的社会においては、人間の生活は一般に日々の密接な直接的面接的な、具体的熟知的全人格的な、情緒豊かに相親和した共同生活となり易いのである。こうした封鎖的社会における人間関係においては、それだけに長老者は一層その家族員や社会成員によって熟知され、親愛され、尊敬されるようになるのである。

しかも、既に祖先崇拜の支配している社会においては、そうした長老者は今は亡くして神格をおびし祖靈にたいしその生存中最も親近な地位にいた者であり、その故に現在祖靈の地位を継いで支配を行っている者なのであり、従って祖靈の遺志や祭祀に最もよく通曉している者なのである。だから、つまり、そうした長老者は家長として家族員にたいしては代々の家長の祖靈を代表して支配統率を行うと同時に、またそうした祖靈にたいしては現存の家族員を率えて供養祭祀を捧げるということになるのである。云わば、家長としての長老者は今は亡き祖靈と現存の家族員とを媒介する仲保者の地位に立っているわけである。それだけに、そうした媒介的仲保者としての地位にたつ家長である長老者には既に生前において半ば祖靈にたいするのに似た尊敬や畏敬や權威が与えられ、現存の家族員たちから手厚

い孝養を受けるといふことにもなるのである。

このように、狭小な封鎖的社會においては、長老者は既に生前において熟知親愛され、感謝尊敬を捧げられ、權威威光を与えられることになるのであるが、死後においては、先に述べたような他の社會的諸條件にも媒介されて、不斷に今尚いますが如くに微細な点にわたって生き生きと追慕愛惜され、またその靈魂は死の故に超人間的な神格をおびて一層高い畏敬や畏怖を受け、ついに神威をもつにいたるのである。だから、長老者が權威をもち、死後においても靈魂というかたちにおいて敬愛畏敬されるにいたる一つの社會的條件は、未開の生産力の低い、狭小な閉じられた特に農業生産を主とする封鎖的社會、つまり狭小な封鎖性という社會構造にあると云わねばならないのである。周知のように、中國の狭小な封鎖的農業社會においては祖先崇拜が広く高度に普及していたに拘らず、地域的移動性の高い商工業的開放的社會を生活の場とする華僑にはそうした祖先崇拜が稀薄であつた一つの理由はそこにあると云わねばならないであらう。

ところで、云うまでもなく、祖先崇拜は人間社會の歴史において既に早くからみられ、古代や中世を経て、近代や現代にまでも及んでいるものがあるわけだから、その内容も歴史的にいろいろと変遷してきているのである。それだけに、祖先崇拜を凡て上述の社會的諸條件のみによって基礎づけることができると考えるわけにはいかないのである。特に家父長制家族の段階における祖先崇拜を上述の社會的條件のみによって説明しようとする場合には、その最も重要な内容を見失ってしまうことになると考えられるのである。われわれは更に別途の方向にそうした祖先崇拜の社會的基礎を探らねばならないのである。

周知のように、祖先崇拜は、例えば古代ローマのものやわが國の徳川時代や明治維新後のものなどについてみられるように、家父長制家族と密接な適合關係をもつていて、家父長制家族が祖先崇拜を成立せしめる重要な社會的基礎

となつてゐるという事実を見逃すわけにはいけないのである。ところで、一般に人間の家族集団は二つの社会的人間関係、すなわち、夫婦の婚姻関係と親子兄弟姉妹の血縁関係によって構成されてゐるのであり、社会がそうした二つの側面の何れを重視するかによつて、家族集団も二つの類型、すなわち、夫婦と未婚の子女から形成されていて、その子供が結婚すると、新しい家族をつくつて出ていく近代的小家族という類型と家が祖孫を通じて過去から未來へと直系的に連続繼承されるために、家督を相続する長男は結婚後も父母と同居し、次三男は結婚すると新しく分家をつくつて出ていく直系的な家父長制家族という類型などに分たれるのである。そして、云うまでもなく、近代的小家族においては個々の成員の意志や人格が尊重され、成員間の比較的な平等が基調とされるのに対し、家父長制家族においては祖孫を通じて直系的に繼承される家の存続發展が個々の成員の意志や人格よりも遙かに重要なのであり、個々の成員の意志や人格はそうした家全体の意志に従属せしめられ、あるいは犠牲にせしめられ、そうした家を繼承する家長の強力な權威や権力の支配や統制に恭順することとなり、更にはそうした家長の地位をつぐべき長男は次三男にたいし明確な長幼の上下関係に立ち、男女のあいだにも尊卑の差別関係が作られ、凡ての者がそれぞれ特定の身分的序列関係に組織されるのである。つまり、家父長制家族とは、先祖代々の祖靈の守護のもとに、家父長の權威や権力を基礎として老若男女が縦の主従関係に序列づけられた、親子中心の、また長男子単独相続の家族制度なのである。

こうした家父長制家族の成立条件や成立過程を今ここで考察するわけにはいかないが、しかし何れの家族類型もそうであるが、この家父長制家族も矢張り根本的には全体社会の經濟構造と政治構造などによってその發生成立を規定されてゐるのである。それは、極く大ざっぱに云えば、つまり、經濟的には全体社会の生産力が低く、經濟的基盤が劣悪であり、而もその經濟力が一部少数の支配的特権身分層に集中しているために、諸他の被支配的下層身分は個々の自由な独立的經濟活動によつて自立自営することが許されず、主君や領主や共同体や同族や家長などに従属恭順

することによってのみ生活を保障され、また政治的法律的にも全体社会における治安防衛の統治機能が不完全でありとくに下層身分の者になる程、矢張り主君や領主や共同体や同族や家長などに隷従して、強固な主従的結束関係のもとに生活の安定を保障されるといったような社会構造を前提としていたのであり、従って家父長制家族における家長の權威や權力もそうした全体社会の經濟的政治的構造に相應して家全体の自治や統制を独立に行わねばならないところからも一般に強力なものとならざるを得なかったのである。例えば、古代ローマの家父長は國家權力の一部をも委ねられていて、妻子その他家父長の權力に服する者にたいして生殺權、遺棄權、売却權、懲戒權、婚姻締結權、離婚權、財産処分權などの広汎にして強力な權力を有していたのである。家父長制家族におけるこうした家父長の強力な權威や權力は、その内容や程度や範圍などにおいて社会によって多少の相異はあるにはしても、一般に広く認められるところなのである。

このように、家父長制家族における家父長の權威や權力は一般に全体社会の經濟的政治的構造との特有の關連のもとに強力になり易い外的な社会的基礎をもっているのであるが、しかし同時に一層根本的にはそうした家父長制家族において家父長が先祖より繼承して支配している家産こそがそうした家父長の權威や權力を一層強力ならしめる内的基礎であると云わねばならないのである。家父長の權威や權力の基礎は家父長の支配するこうした經濟的物質的な家産に外ならないのである。家父長はこうした家産を一般には先祖から直系的に繼承することが多く、それだけにそうした家産にはいわゆる祖遺產意識が強く結びついてくるわけである。家父長は、祖靈の生存中最もそれに身近な地位にいて、その遺志に最もよく通曉せる者として、そうした家産における祖遺產意識のもとに父祖の遺志を紹述し、父祖伝来の家を維持統制し、それを子孫に連続繼承せしむべきなのである。そして、そうした家督を長男子が相続し、また家産の相続においても長男子が殆んど全部、あるいは大部分を優先的に相続する場合には、そうした長男子は他

の兄弟と明確に身分的に差別された優越的地位に立つわけであるが、それにしてもそれ等の家族成員は凡てそうした家産を支配せる家父長の強力な權威的統制力に恭順しなければならぬことになるのである。このようにして、父祖から直系的に家産を相続せる家父長が、そうした祖遺産意識のもとに、先に述べたような意味における媒介的仲保者の立場と役割りにおいて家族成員全体を率えて、そうした祖靈に感謝報恩の供養をささげることこそが家父長制家族において祖靈を祭祀し、祖先を崇拜するにいたらしめ、そうした祖靈祭祀や祖先崇拜を重視せしめるにいたる実質的経済的な根本条件なのである。この点について、中国の家父長制家族においては、男子への均分相続が行われていたために、わが国のものと較べた場合、それ程直系的な家というものがみられず、祖遺産意識も少く、家長権も弱く、長幼の序列はあるにはしても、長男と次三男との間にそれ程厳然たる身分的差別も見出されず、祭祀の相続も比較的輕視されていたといわれるのであるが、それは蓋し当然のことと云わねばならないであろう。

二

次に、ここで簡単にわが国の徳川封建制社会における家父長制家族の祖先崇拜について考えてみることにしよう。わが国において、祖孫を通じて家が直系的に継承され、而も長男子に家督や家産が相続されるという形での家父長制家族が確立されるにいたったのは、歴史的には徳川時代の封建制社会においてである。そして、それは先ず武士の身分層のうちに生み出され、やがて一般庶民の身分層のあいだにも広く滲透していくようになったのである。

先ず徳川時代における武家社会は、將軍↓諸侯↓家臣というヒエラルヒーにおいて、家臣は主君から武勲や勲功にたいして恩恵として知行あるいは俸禄を給付され、家臣はそれに対する報恩のため反対給付としてそうした主君に対して軍役奉仕や絶対的な忠誠や忠義をつくすという封建的主従関係によって構成されていたのである。武士の家族の生

活は専らこうした知行や俸禄、つまり家禄を基礎とし、凡ての家族員はこうした家禄を離れては生活し得なかったのである。そして、封建社会の秩序が強固に確立され、従つて次第に戦乱の時代も過ぎて、武勲や勲功を挙げる機会も少くなるにつれて、それぞれの階層における武士家族は等しく一層、自己の生活の経済的社会的な基礎ではあるが、しかし未だ決して近代的な完全な私有財産という性格をもつていないところの、そうした知行俸禄を恩恵として授けてくれる主君に対して絶対的な服従や忠義や報恩をささげ、主君もそれを要請強要することとなってくるのである。又家父長をはじめ、その家族員は凡てそうした家禄を子孫に伝えてくれた祖霊に対しては感謝報恩の供養をささげて、その遺志を紹述し、その祖霊を祭祀し、崇拜することを怠らなくなるわけである。更に又家父長はこうした家禄を支配統制し、それによつて家族員の生活を凡て一応保障するという地位にいることから、凡ての家族員にたいし強力な権威や権力をもつことになる。ところで、又武士の家族では、家督や家禄を相続するのは、云うまでもなく、長男子なのであり、長男子が家督や家禄を相続した後にも、その次三男らには何らの財産も与えられず、その厄介と呼ばれて、分家することも許されなかった。高級の武士では俸禄からの収入をいくらか分けるとか、大名ではその領地のいくらかを分けて分家させることもあるが、その場合も分家は飽くまでも本家の家父長の統制に服することになり、大名の分家などは内証分として公式に幕府から独立の一家として認められるのではなかった。このように、武士の家父長制家族においては、家父長やその家督家禄をつぐべき長男子の権威や権力が極めて強力であつたのは矢張りそうした家父長制家族の基礎に知行俸禄、つまり家禄というものがあつたからである。だから、逆に、例えば、父が百石の俸禄を貰っている時、その子が何らかの勲功によつて主君から新たに百五十石の俸禄をうけるようになったような場合には、その子は父の死後その家をつがないで、新たに一家を創立するようなこともあつたと云われるのである。何れにしても、徳川時代の封建社会における家族の典型とされた武士の家父長制家族において、主君の恩に

報い、祖先を尊び、家を重んずるにいたらしめたものは主君から先祖代々にわたって授けられている家祿なのであり。そうした家祿が武士の家父長制家族における祖先崇拜を成立せしめた実質的経済的な基礎条件なのである。

次に徳川時代の農民層における家父長制家族の事情を見てみよう。徳川の封建制度は自然経済的な農業経済を基礎とし、農民は領主の領有する領地を耕作する領民、つまり領地に附属する隸農として領主にたいし全剰余にたつするほどの生産物地代や貨幣地代としての年貢や貢租を支払うことを強制され、農民は身分的自由や移転の自由や職業の自由もなしに土地に緊縛されて耕作に従事することを強制されるといういわゆる経済外的強制にもとづいてそうした年貢や貢租を領主から徴収収奪されるという関係を前提としていたのである。だから、農民の家族においては、武士の家族のように、領主や先祖に感謝報恩すべきほどの家祿や田畑を給与継承されているわけでもなく、また家父長にしても子孫には領主との間の貢納と収奪の関係を継承するのであり、この点においては農民の家族は、特に貧農の家族では、代々の祖先に感謝し、その祖霊を祭祀するという祖先崇拜の成立する物質的基礎やまた家父長がその家族成員にたいし服従や恭順を強制しうるほどの強力な家父長権の成立する経済的基礎や従ってそうした家父長権にもとづく家父長制家族などの成立する実質的な基礎条件を欠いていたと云わねばならないのである。然しながら、また、一般的にみて、徳川封建制下の農民の農業経営は、未熟な生産技術や低劣な生産力のもとで、領主にたいし全剰余にたつするほどの貢租を貢納することを強制されていたために、自家労働評価の欠如と動物的水準の生活という非合理的野蛮的方法による云わば自己搾取に基づくところの、又家族全員による相依相助の協働経営に頼らざるを得なかったのである。そして、その場合、矢張り、長年の経験をつんだ家長がそうした家族員全体の共同耕作や協働作業のみならず、広く生活一般を指揮統制したのであり、個々の家族員はそうした家父長の支配する家の全体的秩序や共同的強制のなかに埋没吸収せしめられていたのである。この点において、農民の家族においても、封建制のもとにおけるそう

した特有の経営条件のために、家父長の權威や權力を大ならしめるにいたった社会的条件があったのであるが、領主がまた自己の農民支配を確立するためにさまざまな政策法令によって農民家族の家父長權を強め、家父長專制の家族制度を農民にも押しつけたのであり、更にはまた、後で指摘するように、幕府や領主は道德的イデオロギーの面においても農民にそうした家父長制家族を強要し、領主や先祖にたいする忠誠忠義や感謝報恩をいたすべきことを奨励したのである。このようにして、農民家族における家父長の權威や權力は、勿論武士家族の場合のものとはその程度や内容において劣るにはしても、又上農層と中貧農層の間では相違があるにはしても、矢張り一般に強大なものとなっており、また相続の問題についても、封建的貢納關係を確保し、経営面積を固定させるための分地制限令がしかれていたために、例え田畑が新たに開発されたり、潰れ百姓ができたりするにつれて分家が行われてきたにはしても、然しそれには当然一定の限界があるため、そうした一定の限界にたつた場合には、村々の戸数も固定してゐるために矢張り分家も制限されて、多少の家産の長子相続制を採らざるを得ず、従つて次第に家督や家産をつぐ長男子の優越せる身分的地位も生じ、又それに應じて祖先崇拜をも受け入れる實質的經濟的な基礎条件が生み出されるようになったと云つてよいであらう。のみならず、当時の農民には、強い宗教的な感情や觀念があったために、その点からもそれだけ一層祖靈祭祀や祖先崇拜が強化されたと云つてよいと思う。

次に町人の身分層における家父長制家族について一瞥しておこう。徳川の封建制社会は自然經濟的な農村經濟を基礎とし、それを維持強化するために、鎖国政策によって外国商品の侵入による商品經濟の發展を抑止し、またそうした商品經濟の農村への侵入をできる限り阻止したのであるが、然し城下町たる都市においては貢租の商品化や幕府諸藩の財政維持のための殖産興業政策などによって徐々に商品經濟が發展し、町人の商工業活動が活潑になってきたのである。そして、そうした町人は自由に独立して新しい商業や製造業を自営し、自己の能力と勤勉によって産をなし

ていったものであり、西鶴が描いているように、「親のゆずりの財産にて身をすごしけるは、武士の位牌知行取つてくらすに同じ」として、自ら独立自営の町人たることを誇りとさえしていたのである。だから、こうした町人の家族では、家父長の權威や権力は武士や上農層の場合ほど強力でなく、主婦の地位も高く、相続についても男女諸子平等というわけにはいかなかったが、決して長男子単独の相続とはならず、可成り広く個々人の人格が尊重されて、分割相続も行われ、娘が家をついで大部分の財産を相続するということもみられたのである。江戸時代の前期十八世紀の中頃までは特にそうであったといわれる。然し、それにも拘らず、江戸時代の中頃から後期に移るにつれて、商業資本が徐々に発展し、町人の階層的分化も次第に固定し、大町人らが株仲間を組織して特権を独占し、市場を独占的に統制するようになってくると、特にそうした上層町人の家族においては特権としての株が武士の知行俸禄と同じような先祖からの家の世襲財産となり、従つてそれだけそれを伝えし先祖に感謝の念をいだくようになり、またそれを継いでいる家父長の権力も強まり、家業を大事にすべしとし、やがて長男子がそうした家伝来の財産や家業を継ぐべきものとされて、孝道も説かれるというようになっていったのである。そして、こうした家父長制家族や祖先崇拜の理念がやがて町人の中下層にも拡まるということになっていったのである。その場合、幕府や領主が道徳的イデオロギ―として矢張り町人にもそうした家父長制家族や祖先崇拜の理念を奨励したのであった。このようにして、徳川の封建制社会における町人の身分層においても、家父長制家族や祖先崇拜が、武士や農民の場合とは、またその上層と中下層とは、その程度において大きな差があるが、然し広く同様に一般的な理念として通用し、また現実ともなっていたのである。

このように、徳川の封建制社会における何れの身分層においても家父長制家族が支配的であり、また祖先崇拜がそうした家父長制家族と相互に密接な適合関係をもっていて、家父長制家族が祖先崇拜を維持し、祖先崇拜が家父長制

家族を強化しているのである。そして、こうした家父長制家族と祖先崇拜を成立せしめた実質的経済的な基礎こそが家父長が祖先より受け継いで子孫に継承すべき家産に他ならないのであり、そうした家産こそが家父長の権力を強大ならしめ、家父長制家族を維持し、祖先崇拜を成立せしめた実質的な根本条件なのである。

ところで、わが国においては、徳川の封建制社会においても、また明治以後においても、そうした家父長制家族や祖先崇拜が指導的な道徳的イデオロギーとして政治的政策的に教育され、宣伝され、強制もされたのであるが、それだけそれは一層強化され、長らく日本人の社会的性格となってきたのである。そして、そうした道徳的イデオロギーの支柱であったものは、云うまでもなく、儒教道徳であった。儒教道徳はもと中国における周代の封建制社会を基礎づけたイデオロギーとして始まり、やがて宋代における朱子学へと発展していったのであるが、それがまたわが国の封建制社会や家父長制家族をも基礎づける恰好のイデオロギーとして採用されたのである。儒教道徳の中心は君臣や父子や夫婦などを凡て上下尊卑の上下関係に序列づけ、下は上に恭順すべしとして、忠や孝や従を偏重することにあった。だから、それは先ずわが国の封建制社会における武士の身分層に受け容れられ、そうした支配身分たる武士の身分層のための道徳であったのであり、また實際武士の身分層においては封建君主にたいする忠と親にたいする孝とは、前に述べたところから明らかなように、密接な不可分の関係におかれていたのである。そして、そうした支配身分層たる武士は、自己の特権と支配を確立強化するために、そうした儒教的イデオロギーを被支配身分たる農民や町人たちにも強制したのである。またそれがやがて明治維新後の天皇制国家のもとにおいて特有の家族国家観となつて現われ、また依然として家父長制家族を維持するイデオロギーとして採用されたのである。つまり、明治維新後の絶対主義的天皇制国家の政府は封建君主にたいする忠を近代的な中央集権的国家や天皇にたいする忠に拡大し、しかも義は君臣たるも情は父子であり、政府は子たる臣民を親心をもって指導するものであるとし、皇室を国民全体の宗家

や総本家として、そうした皇室の皇祖皇宗の皇運を扶翼することが同時に臣民みずからの祖先を顕彰する道であると説き、そうすることによって国家や天皇にたいする忠と親にたいする孝とを情緒的に一本にした家族国家観を作り出し、その結果そこに祖先崇拜、家父長制家族、天皇崇拜、家父長制国家、臣民意識などを一連のイデオロギーとして組織して、それ等を維持強化したのである。

それと同時に、わが国における祖先崇拜や家父長制家族は、明治以前においてもまた以後においても、仏教信仰によっても支援されてきたのである。従来わが国における宗教的信仰は著しい混雑性や重層性を示してきているのであるが、仏教もわが国においては一般にはいわゆる解脱の教義としてではなしに、銷災致福や鎮護国家や加持祈祷の呪術的儀礼として受けとられ、わが国古来からの民族宗教としての呪術信仰や神道信仰と衝突することなしに並行的に採用されてきたのである。従って、例えば、一般の家々に神棚があると同時に仏壇があるという具合なのである。それで、こうした仏教信仰が、氏神信仰や産土神信仰などとも結びついて、実は教義や儀式の面において家父長制家族における祖先崇拜を重要な内容とし、祖先崇拜はこうした仏教信仰によっても支援強化されてきているのである。このことは、例えば、祖先崇拜が仏壇を媒介として営まれている事実や、また一般に仏様とは仏教本来の覚者を意味せず、死者や死せる先祖の別名であることが多い事実や、祖霊に法要を供養したり、祖霊の守護や冥福を祈ったりする儀礼を僧職者が司っている事実や、また多くの僧職者が親や先祖の恩にたいする感謝報恩を力説してきた事実などによっても明らかであろう。わが国では神様には現世利益や病氣治療を祈願し、仏様には祖先の供養や死後の冥福を祈るといのが一般であろう。このようにして、仏教信仰が、先ほどの儒教道德と並んで、また氏神信仰や産土神信仰や神道信仰などと混淆して、わが国の祖先崇拜や家父長制家族をイデオロギーの面において支援強化してきたのである。

おわりに

われわれは、これまでに、祖先崇拜の社会的基礎を明らかにし、祖先崇拜と家父長制家族との適合関係を分析し、それ等がいかなる社会的存在によって規定されているか、またいかなるイデオロギーによって支援されてきたかを、特に日本の場合を考慮しながら究明してきたのである。そして、そうした祖先崇拜や家父長制家族を規定している根本的究極的な社会的条件を経済的な家産に他ならないとしたのである。であるならば、わが国の太平洋戦争後において改正された民法は、男女同権と諸子平等の原則を打立てることによって、既にそうした家父長制家族や祖先崇拜を崩壊せしめて、近代的な小家族を成立せしめる根本的な社会的基礎を少くとも法律的形式的には確立したのであり、また経済的実質的にも、特に農業家族を除いては、均分相続にもとづく近代的小家族化の過程が次第々々に発展してきているのである。ただ遺憾なのは、折角こうした民主的な近代的小家族が徐々に進展しだしている昨今において、誤まれる道徳教育や宗教教育の必要を力説し、民法や憲法を反動的に改悪せんとし、家父長制家族や祖先崇拜や天皇崇拜や家族国家などの復活を根強く主張する傾向が一部に厳存していることであるが、そうした歴史的反動の傾向が一体何を求め、何を企図しているのか、またそれが如何なる結果を生み出すものであるかは、既にこの小論の簡単な分析によっても略々明白であろう。ここで、少し唐突ではあるが、かつてマックス・ウェーバーが、東洋の社会が近代的合理化をとげず、前近代性に停滞しているのは、西欧のエトスが人間の内面的尊厳を志向するのに対し、東洋のエトスが人間の原罪や根源悪を知らずして、何よりも外面的尊厳や家父長制的伝統主義を重視し、従って東洋的世界が魔術の園たることに基づくとした、あの含蓄ある言葉を思い起してみるべきである、と思う。